

登場人物

夢川夢子

八王子で実家暮らしの30歳 主なワードローブはお母さんがバーゲンで買ってきた服 好きなタイプは大杉漣と西岡徳馬 眼鏡は中一からずっと同じものを愛用している

シンデレラ

埼玉でバンドマンと同棲中の33歳 高価なブランドもの一点とファストファッションを組み合わせるのが王道スタイル 美味しいバゲットを買いに鎌倉まで行く

ラプンツェル

白銀台の高級マンションに住む専業主婦の30歳 人気モデルがプロデュースしているブランドで一万円以上するTシャツを普通に買う 主な夕食はママがくれる高級なお惣菜

赤ずきん

23区外のアパートで一人暮らしの32歳 物販用に作ったが一着も売れなかった自作のパーカーを愛用 コンビニの期間限定スイーツをつい買ってしまう

莓ちゃん

八王子でギャル友5人とルームシェアしている30歳 夢子とは、まだ承認欲求が芽生える前の小学校一年生からの付き合い 主なワードローブは社割で買ったむげん堂の服

理系の男性

数式と定義を重んじ、恋愛にもそれを当てはめようとする ファッションのポイントは眼鏡 趣味はプラモデルを作ること ガンダムを語らせたら長い 最近DJデビューをした

文系の色男

フィーリングとロマンチックの塊 「子犬かわいいね」と同じ意味合いで「君ってかわいいね」と言える 自分が彼氏の距離感で女の子に接している自覚はない

ノンさん

夢川家の末っ娘という設定の愛玩犬 好きな食べ物は馬のアキレス腱 ラッキーちゃんという名前のゴールデンレトリバーの彼氏がいる いきなり馴れ馴れしくされるとキレル

シーン1 幸せのピーク

王子様：僕たち今幸せだね。

夢子：はい。

王子様、夢子を押し倒そうとするも、夢子が拒む。

夢子：あの、ちょっと、待ってください。

王子様：こわがらなくていいよ。

夢子：違うんです。

王子様：可哀想にまだ混乱しているんだね。あの恐ろしいドラゴンは、僕が息の根を止めたから安心して。

夢子：違うんです、今が幸せのピークだなんて思って。

王子様：そんなことはないよ。僕らはお互いに一目会った瞬間に惹かれあった。君は運命の人だ。君のことをもっと教えてほしい。

夢子：それです、その作業って、もはや現実じゃないですか。

王子様：作業？

夢子：お互いが、一方的に妄想していた相手と現実の相手の違いを、ひとつひとつ確認していく作業です。

王子様：生々しく言い過ぎじゃないかな？

夢子：でも、これまでもご経験ありますよね？

王子様：そういえば、悪い魔女から助け出した姫も、大きな怪物から助け出した姫もそんなようなことを……

夢子：じゃあ、伝わってますよね、私のピークの意味。

王子様：まあ、それはさ、おいおいとして、

王子様、強引に夢子を押し倒そうとするが、夢子も負けじと押し返す。

夢子：これもです。妄想の王子様より現実の王子様の方が、セックスが上手いわけない。

王子様：そんなのやってみなきゃわからないでしょ。

夢子：なんか、キスしてる時に前歯の裏をしつこく舐めてくる感じで、すごく嫌な予感がしてるんです。だから、ここがピークです。

王子様：そうかな？

夢子：絶対そうです。それで、王子様に折り入ってお願いがあります。

王子様：お願い？

夢子：いまここで、私を殺してください。

王子様：ん？情緒不安定なのかな。お城に戻ったら一緒にセラピーを受けよう。

夢子：結構です。私、幸せのピークで、一番気持ちいい状態で死にたいんです。こんなこと、他の人には頼めないんです。お願いします。

王子様：本当に、それでいいの？

夢子：それが、いいんです。

王子様：締めるよ。

王子様、夢子の唇に優しくキスをする。

王子様：おやすみ、ブス。

「バッハ フーガ ト短調」がかかる。

王子様、夢子を横たえて首を絞める。夢子、苦しそうな、気持ち良さそうな顔を浮かべ、息絶えていく。

ゆっくり明かりが消える。

第2場 悲劇のヒロイン達〜おとぎ話編〜

暗闇の中「パッヘルベル カノン」がかかり、ほどなく明かりがつく。カノンの調べにのせてナレーションが始まる。

ナレ：むかしむかし、と言ってもそれほどむかしではない程度にむかしのお話です。副都心線が埼玉に入ってすぐ辺りのところに、シンデレラという名前の女性が住んでいました。

シンデレラは来る日も来る日も、人の分までせっせと働いていました。

シンデレラ、一心不乱に仕事をしている。そして、息抜きにツイートをやる。

シンデレラ：（自撮りをして）「今日も一人で残業。私が頑張らないと、みんななんにも出来ないんだから」

フォロワー1：@シンデレラ 私も後輩のミスのせいで今週ずっと残業だよー

フォロワー2：@シンデレラ 私もだよーお昼やすみも20分しかとれてないのに。

シンデレラ：仕事してると自分が誕生日なことすっかり忘れちゃうな（笑）

舞台後ろの壁に、ツイッターの青い鳥のロゴが大きく映し出される。フォロワー達が一斉に、「お誕生日おめでとう！」「ハッピーバースデー」などお祝いのツイートを叫ぶ。

シンデレラ：あー承認欲求満たされるー、よしもうひと頑張り。

ポーンポーンポーンと真夜中0時を告げる鐘が鳴る。

ナレ：一心不乱で仕事をしていたシンデレラは、その鐘の音で、はっと我に帰りました。

シンデレラ：もう12時、いけない！ 終電に乗り遅れちゃう。

シンデレラ、急いで走っていて、ハイヒールが脱げてしまう。

シンデレラ：もう、嘘でしょ。

王子様：どうぞ。

王子様、ハイヒールを拾ってひざまずき、シンデレラに履かせる。

シンデレラ：え！ そんな！ 申し訳ないです！

王子様：一生懸命頑張ってる女の人って、綺麗だと思います。

シンデレラと王子様、手を取って見つめ合う。ガランガラン、と二人が結ばれたことへの祝福の鐘が鳴る。

ナレ：こうして、二人はいつまでも幸せに暮らしました。めでたしめでたし。と、お子様向けの絵本だとここで終わるのですが、このお話は大人向けなので続きがあります。

仕事から帰宅したシンデレラ、ドアを開ける。

シンデレラ：ただいま。

王子様、寝っ転がってスマホでツムツムをしている。

王子様：おかえり。

シンデレラ：今日、夜番じゃないの？

王子様：休んだ。

シンデレラ：なんで。

王子様：プロデューサーが自主レーベル立ち上げるから相談に乗ってほしいって言われて。俺らのバンドをメインでプッシュしてくれるって。

シンデレラ：プロデューサー（笑）。またあの後輩の子、遊びに来てたんだ。

王子様：もうほぼほぼスポンサーもつきそうだし、あいつの同級生が電通にいるんだけど、結構乗り気らしくて、デカイ話になりそうなんだよね。メジャーのやつらとも互角に戦えるから、レコ発でデカイキャンペーンを、

シンデレラ：あー！ もうそういう巨大な敵を倒す、みたいな話ほうざり。

王子様：ほらまた。シンデレラはいつもそうやってさあ。

シンデレラ：巨大な敵と戦う前に、お城の家賃払ってよ。かぼちゃの馬車だってさ、結局、やれスタジオで練習だ、やれライブの搬入だって、王子様ばかり使ってるのに、私が全部、維持費出してるよね。

王子様：だから、今回の話はマジで確実だし、俺はあいつのこと信じてるから。

シンデレラ：じゃあ、彼と付き合っ、彼に家賃も馬車の維持費も出してもらってよ。

王子様：あのさ、バイトを休んだことは悪かった。それは認める。だから、そっちも、俺が謝罪してるってことは認めて。

シンデレラ：ほらまた、王子様はそうやってわけわかんないこといって、まるめこもうとする。

王子様：俺もたいがいだけど、ちゃんと対話が出来ないのって、人間じゃなくて獣だからね。

シンデレラ：はあ？ もういい！ 私出てく。

王子様：シンデレラ、

シンデレラ：こないで。

シンデレラ、ドアから飛び出していく。王子様、ツムツムを再開する。シンデレラ、ドアの前で少し佇んだ後、再び開ける。

シンデレラ：なんで追いかけてこないの？

王子様：だってこないでって。

シンデレラ：は？ 女の子がこないでっていうのはさ、追いかけてきてって意味に決まってるでしょ。なんでさ、ダチヨウ倶楽部から何にも学んでないわけ。ば——か！

シンデレラ、ドアを閉め、走って車に乗る。急いでエンジンをかけて発車させる。

ナレ：シンデレラは、かぼちゃの馬車に飛び乗りました。そして。

シンデレラ：海が見たいな……

ナレ：ところが、シンデレラはあまり運転には適さない心境でした。

急ブレーキとクラクションの音が響き渡り、対向車のライトにシンデレラが大きく照らし出される。

シンデレラ、上半身がガクンと前に倒れる。

ナレ：シンデレラはかぼちゃの馬車の不注意運転で死んでしまいました。

明かりが消えて暗闇になり、鈴と木魚、読経が聞こえてくる。

明かりがつくと、顔に額縁をあてて遺影に見立てたシンデレラが立っている。知り合いが次々弔問に訪れる。

シンデレラ：わざわざありがとうございます。ひさしぶり、お子さん小さいのにわざわざごめんねー。

葬儀場に王子様が駆け込んでくる。

王子様：シンデレラ。家賃払わなかったり、さりげなく置いてあるゼクシィに気づかないふりしたり、色々ごめん。俺、心を入れ替えた。

シンデレラ：王子様……

王子様：俺、バイト辞めて真面目に、ユーチューバーになる！ 絶対ブレイクしてみせる！

シンデレラ：ホントなんにもわかってない！ 呪い殺すよ！

夢子、お焼香をし、号泣する。

シンデレラ：え？ 誰??

ラプンツェル、バルコニーに登場。クマのぬいぐるみと遊んでいる。

ナレ：東京都白銀台に、ラプンツェルという名前の女の子が住んでいました。ラプンツェルは、悪い魔女によって高い塔の天辺に閉じ込められていました。ラプンツェルは学校にもあまり通わず、やがて、家事手伝いというお仕事につきました。

王子様：愛しいラプンツェル、君はこのままここにはダメになる。降りておいで！ 僕と一緒に暮らそう。

ラプンツェル：はい王子様。あの、お友達（クマのぬいぐるみ）も一緒に連れてっていい？

王子様：いいよ。

ラプンツェル：この子はプウちゃんって名前で、好きな食べ物はナスの田楽です。座右の銘は、石の上にも三年。それで、

王子様：降りてからにしようか。

ラプンツェル：じゃあ、受け取ってください！ 絶対絶対絶対受け取ってくださいね。

ラプンツェル、王子様の方へ雑にクマのぬいぐるみを放り投げて、バルコニーから降りてくる。

ラプンツェル：よいしょ、よいしょ。バイバイ、ママ！ ラプは広い世界へ旅立ちます。

ガランガラン、と二人が結ばれたことへの祝福の鐘が鳴る。王子様がラプンツェルの左手の薬指に指輪をはめる。

ナレ：こうして、ラプンツェルは王子様のお城で暮らすことになり、専業主婦というお仕事に就きました。そして……

ラプンツェル、ゴロゴロ寝転がって、ツイッターを見ている。スカートの裾をわざと少しめくって自撮りし、ツイートする。

フォロワー：@ラプンツェル 今日も可愛いねラプンツェルちゃん。

ラプンツェル：ありがとうございます、お気に入りの洋服なんです。

フォロワー：@ラプンツェル 僕、モデルさんの撮影してて、今度被写体になってよ。

ラプンツェル：お誘いありがとうございます。でも人妻なんでごめんなさい。

リビングのドアが開き、王子様が入ってくる。

王子様：ただいま。

ラプンツェル：おかえりなさい。なんか、今日すごい気持ち悪くて。

王子様、ラプンツェルの隣に腰掛ける。ラプンツェル、王子様に甘えるように寄り添う。

王子様：大丈夫？

ラプンツェル：でも、気持ち悪いと気持ち悪いことに集中できて辛いこと考えなくていいから。

王子様：そっか。

ラプンツェル：さっき、ママが来てね、

王子様：またお義母さん来てたんだ。

ラプンツェル：天空の城にある伊勢丹のお惣菜持ってきてくれたの。冷蔵庫の中に入れてくれたって。

王子様：わかった。荷物、魔法の宅急便に出した？

ラプンツェル：なんかもう、今日はすごいダメで。

王子様：いいよ。期待してないから。ラプンツェルは偏差値5だもんね。

王子様、立ち上がる。

ラプンツェル：どこ行くの？

王子様：飯食べてくる。

ラプンツェル：ママが冷蔵庫に伊勢丹の、

王子様：さっき聞いた。

ラプンツェル：ねえ、ラブが眠るまで一緒にここにいて。

王子様：ごめん、疲れてるから、ちょっと一人になりたい。

王子様、出て行こうとする。

ラプンツェル：ねえ、王子様はラブがどっかにいなくなってもいいの？

王子様：ラブは、どこへも行けないよ。

王子様、振り向きもせずドアから出て行く。

ラプンツェル：お酒……お酒飲まなきゃ……お薬も、もっと飲まなきゃ。

ラプンツェル、錠剤を口に放り込み、お酒で流し込む。錠剤やお酒と自撮りをしてツイートする。

ラプンツェル：睡眠薬とお酒、なう。

舞台後ろの壁に、ツイッターの青い鳥のロゴが大きく映し出される。フォロワー達が一斉に、「可哀想！」「話聞かよ」などお祝いのツイートを叫ぶ。

ラプンツェル：そうなんです！ラブは可哀想なんです！

椅子に突っ伏すラプンツェルにスポットライトが当たっている。ラプンツェル、つぶやきながら、徐々に意識を手放す。

ラプンツェル：死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい。

ナレ：ラプンツェルは、SNSを更新しながら、やがて眠りに落ちました。そして、二度と目覚めることはありませんでした。

明かりが消えて暗闇になる。暗闇の中で、鈴と木魚、読経が聞こえてくる。明かりがつくと、顔に額縁をあてて遺影に見立てたラプンツェルが自撮りをしている。

ラプンツェル：あーあ、死んじゃった。ただ優しくして欲しかっただけなのに。

中学時代の同級生が弔問に訪れる。

ラプンツェル：あ、中学の卒業以来だね、ありがと！

同級生：ラブちゃん、私ね、ラブちゃんが死んだって聞いて、人生に後悔したくないなって思って、会社を辞めてインドで自分探しすることにした。あなたの分まで、ガンジス川でバタフライしてくるね！

ラプンツェル：え？ 自分の話？ ねえ、今日は、みんなラブの為に集まったんでしょ。ラブの思い出話だけしてよ。

夢子、お焼香をし、号泣する。

ラプンツェル：え？ 誰??

ナレ：それほどむかしではないむかしのお話です。東京都荒川区に、赤ずきんちゃんという名前の女の子が住んでいました。ある日、赤ずきんちゃんは、2 駅先に住むおばあちゃんの家にお使いに行くことになりました。

ずきんママ：いい？ 赤ずきんちゃん。男の人はみんな「ロリコン」っていう気持ちの悪い病気にかかっているから、声をかけられてもついていってはだめよ。

赤ずきん：ママはどうして一緒に来てくれないの？

ずきんママ：それはね、おばあちゃんとママがとっても折り合いが悪いからよ。でもね、パンと葡萄酒を届けないと、「鬼嫁が私を餓死させようとしてる」って言いふらされちゃうから、お使い、よろしくね。

赤ずきん：はい！

ずきんママ：荒川区は治安が悪いから、気をつけてね。

赤ずきん：気をつけま〜す！

ナレ：赤ずきんちゃんは、荒川電鉄に乗って、おばあちゃんのおうちへ向かいました。

赤ずきんちゃん、都電に乗り、おばあさんの家にたどり着く。

そして、寝ているおばあさんの傍に座って、パンとぶどう酒を差し出す。

赤ずきん：こんにちは、おばあちゃん。パンと葡萄酒を届けにきました。

おおかみ：よく来たね、赤ずきんちゃん。

赤ずきん：おばあちゃん、いつもと声が違うわ。

おおかみ：それは、風邪をひいているからだよ。

赤ずきん：おばあちゃんのお手手はどうしてそんなに大きいの？

おおかみ：それは、お前をしっかりと抱きしめるためだよ。

赤ずきん：おばあさんのお口はどうしてそんなに大きいの？

おおかみ：それはね、性的な意味でお前を食べるためだよ！

赤ずきん：キャー——！！

赤ずきんちゃんがおばあさんだと思っていたのは、下半身がブリーフ丁の男。パトライ
トが点滅し、男は刑事に連行されていく。

ナレ：おおかみは、おばあさんと同じアパートに住む引きこもりの男性でした。赤ずきん
ちゃんは、心に大きな傷を負いました。

赤ずきん：オオカミは男の人、男の人はオオカミ。オオカミは男性器のメタファー……
でも私は絶望したくない！きっと、この世のどこかには、男性がオオカミにならない美し
い世界が存在するはず！

赤ずきん、立ち上がって、あちらこちら探し続ける。

ナレ：赤ずきんちゃんは探し続けました。そして、ついに、見つけました。

従者が駆け込んできて、ひざまずいてうなだれる。

従者：すみません。王子をお助けしなければいけない僕が、王子にドラゴンから守って
ただくなんて……

王子様、颯爽と登場し、従者に声をかける。

王子様：ばか！みんなそういうこと経験して、一人前になってくんだろ。

従者：王子……

王子様が、うつむく従者を顎を掴み、自分と視線を合わせるように少し持ち上げる。

赤ずきん：そう、BLの世界こそ、男性が純粋に恋愛をする美しい世界！

ナレ：大人になった赤ずきんさんは、ボーイズラブ、いわゆるBLを読むだけでは飽き足らず、自分でも描くようになりました。

王子様：俺、いままでずっと隠してしたけど、お前のことが好きなんだ。

従者：王子……そんな、恐れ多いです。でも、自分も！

王子様が攻め従者が受けて、ラブシーンを展開する。

赤ずきん：我ながら、そうとういい出来。よし、PIXIVにアップ〜。一気に売れっ子作家になっちゃったりして。

PIXIVを閲覧している腐女子達から、容赦のないコメントが書き込まれる。

腐女子1：うーん、ウケの男の喘ぎ声がイマイチ。

腐女子2：むしろ、そのキャラでいくなら攻めと受けを逆にすべき。

腐女子1：激しく同意。

腐女子1・2：wwwwwww

赤ずきん：攻めと受けチェンジで。うーん、どうしようかな。

王子様が受け、従者が攻めに交代する。

舞台後ろの壁に、女子が叫んでいる漫画が一コマが大きく映し出される。吹き出しの台詞は「BLが嫌いな女子なんていません」

腐女子1・2が、王子と従者の世界に入り込んで、矢継ぎ早に注文をつける。

腐女子1：バックでやればいいんじゃない。

腐女子2：はい、膝ついて。

腐女子1：腰をもっと反って。

王子様：いたいいたいいたいいたい

腐女子1：美しさのために我慢する！

腐女子2：あなたももっと、腰をグイッとつかないと。

王子様：でも体格差が辛い……

腐女子1：出来ます、ほら。

腐女子2：そうじゃなくてもっところ、

赤ずきん：（腐女子に）ちょっと！私の作品なんで！

腐女子達、赤ずきんに軽く会釈してしぶしぶ去る。

赤ずきん：（王子様と従者に）すみません。ちゃんとおチンチン入ってるつもりでやってもらえますか？

王子様と従者、ラブシーンを再開する。

赤ずきん：まだ入ってないです。そんなんじゃ全然入ってないです。あなたは誇り高き従者、相手は最も敬愛する王子様なんですよ。背中に手をそわせて、そう……あ、いま一瞬入りましたね。その調子で。

従者：王子、僕たち、消費されていませんか？

王子様：今、俺たちは完全に性的に消費と搾取をされているよ。

赤ずきん：出来た！

舞台後ろの壁に、赤ずきんが描いた漫画の扉絵が大きく映し出される。タイトルは「僕たちはマントの陰で」

赤ずきん：今度こそ完璧！ コミケでバンバン売るよー！

ナレ：残念ながら、赤ずきんさんのBLはあまり話題にはならず、やがて、同人誌の印刷代で多額の借金を背負うようになりました。いつしか、赤ずきんさんは、おばあちゃんの年金をあてにするようになりました。

おばあちゃんがちんまりと座っている。赤ずきん、傍で甲斐甲斐しくお世話をする。

赤ずきんちゃん：本当は私がお小遣いあげなきゃいけないのに、ごめんね、おばあちゃん。

おばあさん：いいのいいの、いつもお世話してくれてありがとね。

引き戸が開く音がして、近所の青年が現れる。

近所の青年：こんにちは。

赤ずきん：はい。

近所の青年：これ、うちのばあちゃんからおすそ分けです。白雪堂の信玄餅。

赤ずきん：白雪堂ってことは……大人気で全然買えない、あの毒林檎信玄餅ですか！

近所の青年：そうです。あ、ごめんなさい。おばあさんの分しか。

赤ずきん：私、ダイエット中なので。ありがとうございました。

近所の青年、去る。赤ずきん、おばあさんに見つからないようコソコソと信玄餅を食べようとする。

おばあちゃん：赤ずきんちゃん、誰だったのー？

赤ずきん：宗教の勧誘の人ー

おばあちゃん：そう。

ナレ：人気のスイーツに目がない赤ずきんさんは、証拠を消し去る為に、信玄餅を急いで飲み込みました。

赤ずきん、急いで信玄餅を飲み込もうとして喉に詰める。むせながら机に突っ伏す赤ずきんにスポットライトが当たっている。

ナレ：そして、お正月でもないのに、お餅を喉に詰まらせて死んでしまいました。

明かりが消えて暗闇になる。暗闇の中で、鈴と木魚、読経が聞こえてくる。明かりがつくと、顔に額縁をあてて遺影に見立てた赤ずきんが突っ立っている。

赤ずきん：あー死んだわー

腐女子1・2、甲問に訪れる。

腐女子1：赤ずきんさん、これから絶対ブレイクするはずだったのに！

赤ずきん：いやいや、コミケで全く売れてなかったの知ってるよね。

腐女子2：代われるものなら私が代わりに死んであげたい。

赤ずきん、遺影の枠を腐女子2の方へ差し出す。

腐女子2：でも、赤ずきんさんは天使みたいな子だから、そんなのダメだよって言ってくれてると思う。

赤ずきん：代われるものなら代わってくださいーい。みんな、綺麗事ばかり。

夢子、お焼香をし、号泣する。

赤ずきん：え？誰？？あ、もしかして...！

夢子が泣きながら走り去り、明かりが消える。

第3場 莓ちゃんと色男 その1

暗闇の中、パラパラが爆音で流れる。ほどなくけばけばしい色の明かりがつき、バルコニーでパラパラを踊る莓ちゃんの姿が浮かび上がる。

色男登場し、爆音に負けないように、大声で莓ちゃんに呼びかける。

色男：莓ちゃん！ 莓ちゃん！ （大きな声で）いーちーごーちゃん！！！！獅子舞の練習？

莓ちゃん：パラパラですけど。

色男：レジ代わって。

色男、莓ちゃんになれなれしくさわりながら話しかける。

莓ちゃん：はあ？ ウチあと5分休憩残ってたけど。ねえ、ウチさあ、むげん堂のバイトってもっと楽だと思ってたんだけど。

色男：店戻る時にさ、お香、無くなりそうだから足しといて。

莓ちゃん：どのお香？

色男：あのさ、田舎から出てきた美大の一年生がみんな買ってくやつ。

莓ちゃん：了解。だから、彼氏の距離感で話しかけてくんなって。つかさ、最近この時間に絶対休憩とるよね。

色男：まあね。（下をチラチラ気にしている）

莓ちゃん：何？

色男：何もないよ、早く行けよヤリマン。

莓ちゃん：ウチはたとえワンナイトでもその間はマジ恋なのでヤリマンではありません。……興味失くすの早すぎだろ。もしや、気になってる子が毎日この時間に下を通るとか？

色男：まあ。

莓ちゃん：え？　なんで声かけないの？　お客さんにだってすぐいくくせに。

色男：どう話しかけていいかわかんないんだよね。

莓ちゃん：お前が話しかけらんないって、超絶可愛すぎってこと？　ウチも見たい。

色男：いや。可愛い分には全然どんだけでもいけるんだけどさ、俺、ブスってどうやって声かけたらいいかわかんないんだよね。

莓ちゃん：はあ？！

明かりが消える。

第4場　林檎と地味でブスなOLの類似点

暗闇の中、「ベートーヴェン　ピアノソナタ第14章　月光」の調べが流れる。第4場の間ずっと流れている。

明かりがつくと、夢子が横たわっている。大きく円を描いて歩き、一日を一周としてグルグルとまわる。

夢子：7時。瞼を開ける。適当な服を着て、食パンが何かを食べる。満員電車からのタイムカード。12時。15時。定時。満員電車からの地元。家に帰って、お米と何かしらを食べて、お風呂。テレビでも見る。瞼を閉じる。

夢子が2周目に差し掛かったら、先生が登場し、壇上で授業を始める。夢子は小声でつぶやきながらまわり続ける。

先生：はい、授業を始めます。えーこっちに林檎が2個あります、こっちに林檎が3個あ

ります、それを足したら林檎が5個になります、っていうのが数学の根本です。本当は5個の同じ林檎ではなくて林檎ABCDEなんだけど、例えばスーパーで売る時は一個100円の同じ林檎っていうことにしてしまっただけで、だから林檎5個だと500円ですねってことになる。実はよく見れば、微妙かもしれないけれど確実に大きさ・色・形・重さ・甘さが違うんだけれども、それをあえて無視することによって色々出来ますよっていうのが数学の本質です。これは言わずもがな、林檎じゃなくてもいいです。みかんでも、鉛筆でも、スーパーカーでも、(夢子をチラッと見て)地味でブスなOLのこれといった変化のない1日でも、代替え可能です。

先生、壇上から降りて退場。夢子はまわり続ける。
徐々に暗くなって、明かりが消える。

第5場 莓ちゃんと色男 その2

莓ちゃん：今日も？

色男：そう、あともうちよつとで通る。

莓ちゃん：うちも見たい。

色男：ダメだよ、レジ無人になっちゃうから。ほら。

莓ちゃん：えー。この時間、客全然来ないじゃん。

色男：なんかさ、いつも一瞬だけ目があってる気がするんだよね。

莓ちゃん：キモ。つうか、まだ声かけれないの？ ブスだから？

色男：それもあるけど、なんか辛そうなんだよね。

莓ちゃん：それこそ、声かけて、落ち込んでる理由聞いてあげて、一緒にカラオケとか行ったらいいじゃん。

色男：いや、はっきり理由があつて辛そうなんじゃなくて、なんか、ゆっくり時間をかけてそうになつちやつたっていうか、もう、とつくに終わつちやつてる状態っていうか、そういうのって、俺なんかガしてあげられることあんのかね。

莓ちゃん、号泣する。

色男：莓ちゃん？ メイク落ちるよ、別人になっちゃうよ。

莓ちゃん：うるさい。ギャルは情に厚いんだよ。今の話、飯島愛ちゃんのブログのコメント欄に書き込むわ。

色男：やめて。

莓ちゃん：でも、それじゃウチのギャル魂がおさまらないから！

色男：じゃあレジ変わって。

莓ちゃん：わかったー

莓ちゃん、号泣しながら退場。色男、煙草を取り出し、マッチを忘れたことに気づく。

色男：莓ちゃん、火持ってない？あ……

色男、下を通り過ぎる夢子をただ見つめる。

色男：こうやってひたすら眺めてるだけって、なんか意味あんのかな……

明かりが消える。

第6場 地味でブスなOLのビューティフルドリーマーな日々

この場面は、夢子の「瞼を開ける」という台詞をきっかけにして明かりがつき、「瞼を閉じる」の台詞をきっかけにして明かりが消える。

暗闇の中、アラームの音が鳴り響き、眠たげな夢子の声が続く。

アラームの音

夢子：(1周目)7時。また世界が始まってしまった。もう5年くらいセックスをしていない。もしかしたら、これから一生セックスしないのかもしれない。別にセックスがしたいわけじゃないけど、もう一生、女性として求められることがなかったらって考えると、さみしい。このまま、ずっとひとりぼっちのままかもしれない。すごく怖い。瞼を開ける。

明かりがつくと、夢子が横たわっている。大きく円を描いて歩き、一日を一周としてグルグルとまわる。

夢子：適当な服を着て、食パンか何か食べる。

夢子ママ、ノンさんを抱いて登場。

夢子ママ：なんで毎朝そうやってバタバタバタバタ、あと5分目覚まし早くかけたらいいだけなのに。ねえ、ノンちゃんだってそう思いまちゅよねえ。うん、うん、それでちゅよねー

夢子：満員電車。頭を使いたくないので、スマホで2ちゃんねるのまとめサイトをずっと見ている。会社は駅から歩いて3分。タイムカード。

上司：では朝礼はじめます。いつも言うことですが、ミスがないよう気を引き締めてしっかり作業にあたってください。では今日も1日よろしく申し上げます。

OL1・2・3：よろしく申し上げます！

夢子：(小声)よろしく申し上げます。マニュアルに沿って、データを入力したり処理したりする。誰でも三ヶ月くらいで一通り出来るようになる。(間)12時です。

OL2：ねえ、OL1、オムライス食べるならそろそろお昼出た方がいいんじゃない？

OL1：あー迷ってるんですよね、今日オムライスにするか。

OL3：ちなみに、今日の社食のオムライスは何オムライスなんですか？

OL1：中華風オムライスです。

OL2：ちなみに何曜日が何オムライスなんでしたっけ？

OL1：月曜と木曜が中華風オムライス、火曜と金曜がケチャップオムライス、水曜がデミグラスオムライスです。お二人と話してたらやっぱりオムライス食べたくなくなってきちゃいました。先にお昼いってきます。

OL2・3：行ってらっしゃーい。

夢子：お昼出ます。コンビニのご飯は予想より美味しくもマズくもないから結構好きだ。

夢子：戻りましたー(間)まだ1分しか経ってない。(間)まだ1分しか経ってない。やっと15時。

OL1：そう言えば、私、また成城石井のチーズケーキ買ったんですよ。

OL2：えーまたー！ あれって、すごい濃厚よね。

OL3：私も昨日買おうか迷ったんですけど、こないだ買った時、一気に全部食べちゃったんで、やめました。びっくりするくらい濃厚ですよ。

OL1：どうかしてるぐらい濃厚ですよねー。

夢子：16時から電話が結構かかってきて、バタバタしているうちに、定時。キティちゃんのラッピング電車で、死んだ目をした大人だけが乗っているのはとてもグロテスクだ。地元。

夢子ママ：(ノンさんが話している風に)「おねえちゃん、たまにはデートで遅くなったりしないの？」そうよねー。ノンちゃんはラッキーちゃんて彼氏がいて、お散歩で会うとお鼻つんつてするのよねー。

夢子：お風呂に入ります。濡れるのも乾かすのもとても面倒臭い。テレビでどうでもいいバラエティーをぼーっと見る。瞼を閉じる。

明かりが消える。

夢子：考えたら怖くなってしまふから何も考えない何も考えない何も考えない。世界が終わりますように。

暗闇の中、アラームの音が鳴り響き、夢子の声が続く。

夢子：(2周目)7時。また世界が始まってしまった。学生の頃、いつのまにかみんな、サッとグループを作って、まるで今までもずっとそうだったみたいに一緒に行動出来るのが本当に意味がわからなかった。大人になっても、私はずっとどのグループとも馴染めない。瞼を開ける。

明かりがつく。

夢子：適当な服を着て、食パンか何か食べる。

夢子ママ、ノンさん(ノーフォークテリア)を抱いて登場。

夢子ママ：なんで毎朝そうやってバタバタバタバタ、あと5分目覚まし早くかけたらいだけなのに。ねえ、ノンちゃんだってそう思いまぢゅよねえ。うん、うん、それでぢゅよねー。

夢子：満員電車。頭を使いたくないので、スマホで2ちゃんねるのまとめサイトをずっと見ている。会社は駅から歩いて3分。タイムカード。

上司：では朝礼はじめます。いつも言うことですが、ミスがないよう気を引き締めてしっかり作業にあたってください。では今日も1日よろしくお願ひします。

OL1・2・3：よろしくお願ひします！

夢子：(小声) よろしくお願ひします。マニュアルに沿って、データを入力したり処理したりする。誰でも三ヶ月くらいで一通り出来るようになる。(間) 12時です。

OL2：ねえ、OL1、オムライス食べるならそろそろお昼出た方がいいんじゃない？

OL1：あー迷ってるんですね、今日オムライスにするか。

OL3：ちなみに、今日の社食のオムライスは何オムライスなんですか？

OL1：ケチャップオムライスです。

OL2：ちなみに何曜日が何オムライスなんでしたっけ？

OL1：月曜と木曜が中華風オムライス、火曜と金曜がケチャップオムライス、水曜がデミグラスオムライスです。お二人と話してたらやっぱりオムライス食べたくなくなってきちゃいました。先にお昼いってきます。

OL2・3：行ってらっしゃーい。

夢子：お昼出ます。コンビニのご飯は予想より美味しくもマズくもないから結構好きだ。

夢子：戻りましたー(間) まだ1分しか経ってない。(間) まだ1分しか経ってない。やっと15時。

OL1：そう言えば、私、また成城石井のチーズケーキ買ったんですよ。

OL2：えーまたー！ あれって、すごい濃厚よね。

OL3：私も昨日買おうか迷ったんですけど、こないだ買った時、一気に全部食べちゃったんで、やめました。びっくりするくらい濃厚ですよ。

OL1：どうかしてるくらい濃厚ですよー。

夢子：16時から電話が結構かかってきて、バタバタしているうちに、定時。キティちゃんのラッピング電車に、死んだ目をした大人だけが乗っているのはとてもグロテスクだ。地元。

夢子ママ：(ノンさんが話している風に)「おねえちゃん、たまにはデートで遅くなったりしないの？」そうよねー。ノンちゃんはラッキーちゃんて彼氏がいて、お散歩で会うとお鼻つんつてするのよねー。

夢子：お風呂に入ります。濡れるのも乾かすのもとても面倒臭い。テレビでどうでもいいバラエティーをぼーっと見る。瞼を閉じる。

明かりが消える。

夢子：ふいに嫌な思い出が蘇って、大声でうわあああああって叫びだしたくなる。何も考えるな。何も考えるな。何も考えるな。世界が終わりますように。

暗闇の中、アラームの音が鳴り響き、夢子の声が続く。

(3周目)7時。また世界が始まってしまった。子供の頃は、大人になったら普通に結婚して子供を2人くらい産むもんだと思ってた。でも違ってた。子供はそんなに好きじゃないけど、自分で産むか産まないか選ぶ権利がないまま、産めない年齢になるのはすごく怖い。瞼を開ける。

明かりがつく。

夢子：適当な服を着て、食パンか何か食べる。

夢子ママ、ノンさん(ノーフォークテリア)を抱いて登場。

夢子ママ：なんで毎朝そうやってバタバタバタバタ、あと5分目覚まし早くかけたらいだけなのに。ねえ、ノンちゃんだってそう思いまぢゅよねえ。うん、うん、そうでぢゅよねー。

夢子：満員電車。頭を使いたくないので、スマホで2ちゃんねるのまとめサイトをずっと見ている。会社は駅から歩いて3分。タイムカード。

上司：では朝礼はじめます。いつも言うことですが、ミスがないよう気を引き締めてしっかり作業にあたってください。では今日も1日よろしくお願いします。

OL1・2・3：よろしく申し上げます！

夢子：(小声)よろしく申し上げます。マニュアルに沿って、データを入力したり処理したりする。誰でも三ヶ月くらいで一通り出来るようになる。(間)12時です。

OL2：ねえ、OL1、オムライス食べるならそろそろお昼出た方がいいんじゃない？

OL1：あー迷ってるんですよね、今日オムライスにするか。

OL3：ちなみに、今日の社食のオムライスは何オムライスなんですか？

OL1：デミグラスオムライスです。

OL2：ちなみに何曜日が何オムライスなんでしたっけ？

OL1：月曜と木曜が中華風オムライス、火曜と金曜がケチャップオムライス、水曜がデミグラスオムライスです。お二人と話してたらやっぱりオムライス食べたくなくなってしまいました。先にお昼いってきます。

OL2・3：行ってらっしゃーい。

夢子：お昼出ます。コンビニのご飯は予想より美味しくもマズくもないから結構好きだ。

夢子：戻りましたー(間)まだ1分しか経ってない。(間)まだ1分しか経ってない。やっと15時。

OL1：そう言えば、私、また成城石井のチーズケーキ買ったんですよ。

OL2：えーまたー！ あれって、すごい濃厚よね。

OL3：私も昨日買おうか迷ったんですけど、こないだ買った時、一気に全部食べちゃったんで、やめました。びっくりするくらい濃厚ですよ。

OL1：どうかしてるくらい濃厚ですよー。

夢子、立ち上がって頭を掻きむしりながら叫ぶ。

夢子：あれ？ 昨日も、一昨日も、その前も、この会話を聞いた気がする。もしや、私は、同じ1日を永遠に繰り返しているだけなのかもしれない。私は悲しきビューティフルドリーマーだ。もしくは、オムライスのローテーションと成城石井のチーズケーキの濃厚さだけを語る永久機関に取り込まれてしまった哀れなドブスだ。

OL1：夢川さん、大丈夫？

夢子：早退します。

夢子、曖昧におじぎをして走り去る。

OL1：夢川さんって、ちょっと変わってますよね？

OL2：夢川さんはミステリアスだから。

OL3：そうそう、夢川さんはクールだから。

OL1：そうですね。

莓ちゃん、キョロキョロ辺りを見回しながら登場。夢子から「いまから死にます」という

メールがきたため、夢子を検索している。

第七場 ありがとう、莓ちゃん

莓ちゃん、バルコニーの上にしゃがみこんでいる夢子を見つける。

夢子：莓ちゃん、今までありがとうね。

莓ちゃん：夢子、ちょっとヤダ、本当にマジいい加減にしなよ。早く降りてきなって！

夢子：それは出来ない。

莓ちゃん：なんで！？

夢子：私はもうダークサイドに堕ちてしまったから。

莓ちゃん：はあ？ うちだって週6でシフト入るのクソだるいし、むげん堂で働いてるとシャワー浴びてもお香の匂いが消えなくて辛いけどさ、死のうとは思わないよ。

夢子：だって莓ちゃんはさ、生活がドラマチックじゃん。彼氏が出来るたびに、ツイッターで「付き合って一週間記念日」みたいな報告して、プリクラ撮りまくって。すぐ別れてギャル友とサイゼリア行って、またすぐ新しい彼氏作ってさ。

莓ちゃん：うちだって、いい加減落ち着きたいと思ってるよ。いつまでもミラノ風ドリアばかり食べてる場合じゃないし。

夢子：それに、莓ちゃんは、私と違って、職場以外の色んなコミュニティに参加してるし。

莓ちゃん：はあ？ コミュニティ？

夢子：繋がりがよくわからない地元の先輩いっぱい知ってるし、W杯の時だけ、急にサッカーファンになってスクランブル交差点で知らない人達とハイタッチしたり、あとあれだ、小雨が降ってる河原でバーベキューして、中洲に取り残されて、レスキュー隊に救助されたりもしてるじゃん。

莓ちゃん：そんだけうちのことディスれりゃ大丈夫だって。

夢子：褒めてるの。私は莓ちゃんみたいに、積極的に人と触れ合っただけを楽しめる人間性を持ち合わせていない〜

莓ちゃん：別に夢子は夢子のままでよくない？ ちょっと面倒くせえけど。

夢子：よくない。私みたいなブスには存在意義がない。

莓ちゃん：あーもう。あのさ、そんな難しいこと考えないで、グレープフルーツ味のお酒飲んで、イケメンとパコったら、気分ぶちアガるって！ とりあえずドンキ行こうよ。氷結ストロングとチー鱈おごったげる。

夢子：莓ちゃん、今までありがとう。

明かりが消える。暗闇に莓ちゃんの絶叫が響き渡る。

莓ちゃん：夢子ー！！！！

「ベートーヴェン テンペスト 第三楽章 ピアノソナタ 17 番」がかかる。

第 8 場 ブラックホールと死亡スイッチ

夢子：あれ？

夢子の声で曲が止み、明かりがつく。

夢子、倒れている。起き上がって周りをキョロキョロと見回す。

夢子：ここが死後の世界！？

チャイムが鳴り、先生登場。続いて、ベールを被ったシンデレラ・ラプンツェル・赤ずきんが登場し、席につく。

先生：よーし。みんな席につけ。

夢子、どうしていいかわからず、教壇前に突っ立っている。

先生：(夢子に席につくよう促す) ほら、そこの地味な君も、早く。じゃあ、授業をはじめろぞ。えっと、今日はどこからだったかな。

シンデレラ：はい、ブラックホールのところからです。

先生：そう、ブラックホールについて。ブラックホールって何だか知ってるか？

ラプンツェル：えっと、宇宙にある暗くて大きな穴？

先生：えーブラックホールというのは、要は情報限界、そこから先は何もない場所です。

赤ずきん：世界がそこでなくなっちゃうんですか？

先生：そう。世界の終わりです。だから、例えば、君達が瞼を閉じる。

明かりが消える。

先生：この状態がブラックホール。ここで世界は終わりです。そして、瞼を開ける。

明かりがつく。

赤ずきん：先生、おかしいです。世界が続いています。

先生：そう。残念ながら、この世界はおかしいので、瞼を開けたら、世界がまた続きます。一方、本当に世界の終わりであるブラックホールは、宇宙の中心にあります。つまり、終わりが、ど真ん中にあるという状態です。

ラプンツェル：なんか、よくわかんなくなっちゃった。

先生：じゃあ、この地球で考えてみようか。今、この地球に、こういう人が、こういう人が、こういう人が、生きていますよっていう情報があるじゃないですか。これが、ブラックホールに入ってしまうと、何も残りません。

シンデレラ：それは完全に無くなっちゃうってことですか。

先生：いや、極限までなくなる。つまり、材料になってしまうということです。わかりやすく言えば、ケーキじゃなくて小麦粉、それも、小麦粉一粒になってしまう。はい、ここ、テストに出るぞ。

男子生徒、バルコニーへ登場。

男子生徒：つまり、小麦粉としても認識されないってことですよ。

先生：そういうこと。遅刻だぞ。ちゃんと席につけ。

男子生徒：ここでいいです。

先生：じゃあ、そこから、ちゃんと聞いとけよ。例えば、彼と先生は同じ男性でありながら、たとえ死んで骨だけになったとしても、重さが違う。つまり固有の情報がある。でも、ブラックホールに入ってしまうと、先生も彼も、完全に同一の存在になる。そして、もうそこからは、（カシャ）

ラプンツェルがプウちゃんと自撮りをしている。

先生：それは授業に必要なな。

ラプンツェル、スマホをプウちゃんの後ろに隠す。

先生：それ（プウちゃん）は？

ラプンツェル：この子とは一心同体なのです。

先生：次やったら取り上げるからな。えー、ブラックホールに入ってしまうと、先生も彼も、完全に同一の存在になる。そして、もうそこからは、何の情報も受け継いでいくことができない。

シンデレラ：それまでの、全部の情報が意味がなくなっちゃうってことですよね。

先生：そう、ブラックホールに入ってしまうと、元がケーキだろうが、土だろうが、水だろうが、人間だろうが、全く同じ存在になる。

シンデレラ：じゃあ、小麦粉一粒が、ケーキだった頃の歴史、例えば、彼女が彼氏のお誕生日に頑張って手作りしたとか、そういうことも何も残らないんですよね。

先生：その通り。そんな思い出は、一切残らない。

赤ずきん：先生。

先生：はい、赤い子。

赤ずきん：ちょっとズしてるかもしれないんですけど……

先生：先生は、理系の男性だからなんでも知っているの、聞きたいことを聞いていいぞ。

赤ずきん：ブラックホールって吸引力があるんですか？

先生：あります。

赤ずきん：じゃあ、今いるここも、吸い込まれちゃうってことですか？

先生：理屈としてはね。ただ遠い、あまりにも遠い。だから全く吸い込まれることはない。

男子生徒：それは、どうやってわかったんですか？

先生：それは、ひたすら眺めた。観察して、とにかく外側から見続けた。そして、そこに入ったものはどうにもならないってことがわかった。

徐々に暗くなる。ぼーっとしている夢子と、夢子を見つめる男子生徒だけがスポットライトで浮かび上がる。

男子生徒：どうして、ブラックホールはブラックホールになったんですか？

先生：重力を持つ物質が自分で自分の重さに耐えられなくなると、ブラックホールになる。つまり、自分の重さを支えきれず、どんどん内側へ内側へ寄って行ってしまって、それが限界を超えると、ブラックホールになる。

男子生徒：一度発生したブラックホールは消えることはないんですか？

先生：ブラックホールは発生するし、消えることもある。

男子生徒：消えることもあるんですね。

明かりがつく。

先生：そう。何か質問があれば、

男子生徒：(遮って) 大丈夫です。僕は優れた文系の男性なので、自分で考えます。

先生：そうか。目に見える事象を、ロマンチックな推論に差し替えないようにな。

男子生徒：気をつけまへす。

先生：君みたいなタイプは、自分の希望的推論に基づいて定義を捻じまげて、

赤ずきん、ラプンツェルに、先生と男子生徒のBLのストーリーを話している。だんだん声が大きくなり、先生に気付かれる。

赤ずきん：先生は受け、彼が攻めでしょ。二人はブラックホールを観測する宇宙船の中で、

先生：そこの二人、何か質問かな？

赤ずきん・ラプンツェル、俯いて返事をしない。助け舟を出すようにシンデレラが挙手。

シンデレラ：あの、ブラックホールが消えたら、その中に吸い込まれてしまった物質も一緒に消えちゃうんですか？

先生：ブラックホールはあくまでも入り口でしかないのです、どこかに繋がっているって可能性もある。

シンデレラ：じゃあ、ブラックホールの向こう側がもしあったとして、その向こう側に出た物質はどうなるんですか？

先生：ブラックホールの向こう側を知るには、見に行くしかない。見に行って初めて、その新しい世界の正体を知ることが出来る。

シンデレラ：わかんないけど、向こう側に何かしらはあると思うな。思いたい。

赤ずきん：なんかちょっと輪廻転生っぽい。

ラプンツェル：生まれ変わったら新しい自分、みたいなね。

先生：新しい洋服を着たから、新しい彼氏が出来たから、インドで自分探しの旅をしてきたから、生まれ変わって新しい自分になる。実に女性らしくて素晴らしい答えですね。えー、そして、ブラックホールに宇宙の全てが吸い込まれたあとに起きることがビックバンです。はい、じゃあ今日はここまで。何か質問はないかな？（夢子に）そこの地味な子、そう君。全然授業に参加しようって意識がないね。

夢子：すみません。

先生：君は何か、質問はないのかな。

夢子：何でも答えてくれるんですか？

先生：そうだよ。先生は優れた理系の男性だから、なんでも答えてあげる。

夢子：じゃあ死亡スイッチは存在しますか？

先生：死亡スイッチ？

夢子：私、ずっと探しているんです。私が何かしらで死んだとして、そのスイッチをピッと押したら、その瞬間、ピュンって、私に関する情報全てがこの世から消えるスイッチなんです。

先生：ドラえもんの道具の話をしてるのかな？先生は物理の先生なので、そんなふざけた質問には答えられません。

先生、呆れて退場する。

夢子：（先生の去っていく背中に）私は大真面目に言ってるんです。

赤ずきん：そのスイッチが押されたら、例えば職場で、あれ、誰かもう一人いた気がするなあって思うけど、誰がいたか思い出せない、みたいな。

夢子：そうです。

シンデレラ：え、それって、超めっちゃ愛されたいってことでしょ。

夢子：え？　なんで？

シンデレラ：超めっちゃ愛されたいから、それが無理なら、全員私のこと忘れてしまえばいいのってことでしょ。

夢子：別に私みたいなドブスが超めっちゃ愛されるなんてありえないんで、

赤ずきん：それですよ。自分が本当は美人だって自覚があって、それを否定されたくないから、敢えて自分でブスって言ってるんですよね。

夢子：違います。

ラプンツェル：大丈夫、わかるよ。(プウちゃんに向かって)自分が好きな人にも嫌いな人にも、出会う人全員に愛されたいよねえ。

夢子：はあ？　私は、私がいなくなった世界でさあ、自分のことを美化されたりけなされたりしたくないだけです。生きてる側の都合で、好き勝手されたくないっていうか……

シンデレラ：じゃあ、なんで私達のお葬式であんなに泣いたの？

夢子：え……

赤ずきん：お葬式の時、正直、最初は誰だかわからなかったんですけど、思い出しました。中学の時に同じ美術部だった夢川夢子さんですよ？

シンデレラ：前、同じ部署だった夢川ちゃん。

ラプンツェル：小学校の同級生の夢子ちゃん。

赤ずきん：私達の代、部員多かつたし、そんなに話したことないよね。

シンデレラ：私も、業務内容全然違つたし。

ラプンツェル：親同士は、PTAの役員で一緒になってからずっと仲よかったみたいだけど。なんか、集団下校の引率をしなくちゃいけなかった時に、うちのママってドジだから、

赤ずきん：後にしよう。

シンデレラ：それで、なんで泣いたの？

夢子：ごめんなさい、わかりません。なんか、急に悲しくなっちゃって、

シンデレラ：でも、あなたは今、そういうのが嫌だって自分で言ったよね。

赤ずきん：私、子供の頃、転校いっぱいしてて、最後の日にぜんぜん仲良くなかった子がすっごい泣きながら抱きついてきて、えーってなったりしたんですけど、そういうことですかね。

シンデレラ：あー、卒業式で泣くのとも一緒じゃない。終わるってことに対してじわーっていう。

夢子：違います。上手くは言えないんですけど。

赤ずきん：こんな言い方はアレですけど、なんで泣いたかと、それを棚にあげて、そんな都合がいいスイッチをどうして欲しがっているのかについて、夢川さんは私達にちゃんと説明する義務があると思いますけど。

夢子：義務。なんで泣いたかは本当にわかりません。死亡スイッチが欲しいのは、虚しいからです。虚しいじゃないですか、自分はもう過去の存在になっちゃったのに、その自分のことをずっと未来まで誰かが話し続けてるってというのがさ。意味ないじゃん。あーあー！ なんかもっと、親より先に死んだことへの後悔とかがガツンとくるのかなって思ってたんですけどね。

シンデレラ：じゃあ……

夢子：そうです。私も死んじゃってるんです。たった一人の友達の前で、飛び降りたんです。それで、あの、こっちも死んでるんで平等な立場として言わせてもらいますけど、さっきから私だけがひどいみたいな言い分ですけど、皆さんも、ちょっとどうかなあってと思いますよ。

シンデレラ：なにが？

夢子：なんか、自分が悲劇のヒロインの物語にどっぷり浸かりすぎじゃないかなあって。

シンデレラ：いいじゃない。自分のことなんだから。それに、夢川ちゃんだって、同じくらいどっぷり浸ってるじゃない。

夢子：私は浸ってないです。地味なブスが今日一人地球上からピュンって音もなく消えた、それ以上でもそれ以下でもないです。死亡スイッチが欲しいのは、その事実をより完璧にしたいからです。

ラプンツェル：本当に気づいてないんだね。

赤ずきん：それって、自覚してる私たちよりよっぼどたち悪いよね。

夢子：私は自分が悲劇のヒロインだなんて思ってません！

シンデレラ：じゃあ、これはなんなの？

シンデレラがいきなり夢子のスカートをまくり上げると、虎のしっぽが生えている。夢子、自分にしっぽが生えていることに驚き、大声をあげながら去る。入れ替わりに、バルコニーに莓ちゃんが登場。

インドのヒーリングミュージックがかかる。

莓ちゃん：あーもう 12 連勤目辛い。バツくれた新人殺す！ あー10 分だけ寝よう。

9 場 夢子の山月記

インドのヒーリングミュージックが鳴り止む。

莓ちゃん：(目覚めて) 寒っ。標高たかつ。ヤッホー

やまびこ：ヤッホーヤッホーヤッホー

莓ちゃん、バルコニーから降りて、キヨロキヨロとあたりを見回す。

莓ちゃん：誰かいませんかー。あーギャルは電波が届かないところに 30 分以上いたら死んじゃうのになー。誰かー、いませんかー？

虎の姿になった夢子がソロリソロリと登場。様子をうかがいながら莓ちゃんに近づき、噛み付く。

莓ちゃん：いつて！

夢子・莓ちゃん：(お互いを誰だか認識して) あー—————！！

夢子：危ないところだった。たった一人しかいない友達、食べるそこだったー

莓ちゃん：夢子？！

夢子：どうも。お察しのとおり私は夢川夢子です。

莓ちゃん：うわあ、マジぱないね。友達が虎にジョブチェンジとかマジウケる。

夢子：私は大真面目なんだけど。

莓ちゃん：ごめんごめん。でさ、ぶつちやけ何があったの？

夢子：あのさ、夜、寝るとき、真っ暗にするでしょ。そうすると、いつも不安で堪らなくなるんだよね。私は誰からも必要とされてないんだって思って、苦しくて苦しくて。

ナレ：するとその時、家の外から誰かが夢子の名前を呼んでいるのが聞こえてきました。声は闇の中から何度も何度も名前を呼びました。夢子は深夜の八王子市を、その声がする方へ走りだしました。そして、いつのまにか高尾山に登っていました。しかも、夢子は左右の手で地面を蹴って走っていました。

夢子：やがて、夜が明け、辺りが明るくなった頃、谷川の水に自分の姿を映してみると、そこに映った私は、虎になっていました。

莓ちゃん：その展開鬼アツじゃん。

夢子：私も初めは信じらんなかったし、これはきっと夢だ、って思った。でも、いくら待っても、夢のはずのこの世界が終わらなくて、あ、これ、違ったわって。

莓ちゃん：ねえ、なんでこんなことになっちゃったのが、心当たりはあんの？

夢子：私もずっと考えてる。でも結局さ、生きていくっていうのは、理由もわかんないまま突然押し付けられた運命を、おとなしく受け入れるってことなのかなって。

莓ちゃん：なんか……深いね。

夢子：全然思っていないでしょ。

莓ちゃん：そんなことないって……昨日同じこと彼ピツピにも言われたし。

夢子：また新しい彼氏出来たんだ。

莓ちゃん：あ、ごめん、こんな時に。

夢子：ズートピア最高ってツイートしてたの、やっぱそうだったんだ。こないだセルシオに乗ってた先輩？

莓ちゃん：いや……

夢子：どうせ、虎になんか言っただってしょうがないもんね。莓ちゃんは人間として幸せに生きてね。じゃあね。

莓ちゃん：もう、ごめんってば、そんなこと言わないでよ。ちゃんと話聞くから。

夢子：私ね、ちょっと前までは、どうして虎になんかになったんだろうって思ってたのに、今は、どうして前は人間だったんだろうって思ってる。きっと私はもうすぐ、ただの虎になる。

莓ちゃん：じゃあ、私が好きな夢子はいなくなっちゃうの？ やだ、そんなのやだよ。

夢子：ありがとう。でも、そうなったら莓ちゃんに会っても気づけなくて、内臓をえぐりとったり、腸をズルズルズルって引きずり出したりしちゃうと思う。ごめんね。

莓ちゃん：うん……

夢子：でもさ、私だけじゃなくてみんな、前は何かほかのものだったんだんじゃないかな。初めはそれを覚えてるんだけど、だんだん忘れちゃって、初めから今の自分だったって思い込んでいるんじゃないかな？

莓ちゃん：ごめん、ウチそういうモヤンとしたこと考えんの苦手なんだよね。

夢子：それでいいと思う。私も虎になれば、モヤンとしたこと考えなくなるから、楽になれると思う。でも、今までの人生が全部消えちゃうって考えると、やっぱり、怖くて、悲しくて、すごく切ない。

莓ちゃん：それは、なんとなくだけどウチもわかる気がする。

夢子：莓ちゃんは大切な友達だけど、でもこの気持ちは、普通に生活することが苦手な人にしか理解出来ないと思う。

ナレ：偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵 当時声跡共相高
我為異物蓬茅下 君已乘氣勢豪
此夕溪山對明月 不成長嘯但成

夢子：なんで、こんな運命になったかわからないって、さっき言ったじゃない？

莓ちゃん：うん。

夢子：でもね、実はちょっと、心当たりはあるんだ。私、人間だった時、会社で相当失礼な態度だったと思うんだよね。12 時です！

OL1・2・3 が突然現れ、会社でのいつもの会話をする。

OL2：ねえ、OL1、オムライス食べるならそろそろお昼出た方がいいんじゃない？

OL1：あー迷ってるんですよね、今日オムライスにするか。

OL3：ちなみに、今日の社食のオムライスは何オムライスなんですか？

OL1：中華風オムライスです。

OL2：ちなみに何曜日が何オムライスなんでしたっけ？

OL1：月曜と木曜が中華風オムライス、火曜と金曜がケチャップオムライス、水曜がデミグラスオムライスです。お二人と話してたらやっぱりオムライス食べたくなくなってきちゃいました。先にお昼いってきます。

OL2・3：いつてらっしゃーい。

OL2：じゃあ私は今日はミラノサンド食べたいから、ドトールが空いてる 13 時以降にお昼出ようかな。

OL3：OL2、本当にドトール好きですよね。じゃあ私は半になったら先に出ますね。

夢子：これは、お昼に出る順番をお互いに譲り合いつつサクッと決めるために必要な会話だったんだなって。やっと 15 時です。

OL1：そう言えば、私、また成城石井のチーズケーキ買ったんですよ。

OL2：えーまたー！ あれって、すごい濃厚よね。

OL3：私も昨日買おうか迷ったんですけど、こないだ買った時、一気に全部食べちゃったんで、やめました。びっくりするくらい濃厚ですよ。

OL1：どうかしてるくらい濃厚ですよー。じゃあ私、今のうちに伝票整理しちゃいまーす。

OL2：じゃあ、私は会議室押さえて、メールの返信しちゃお。

OL3：私、ポットのお湯まだあるか確認してきます。戻ってきたら会議室にダンボール運ぶので、準備だけお願いしちゃっていいですか。

OL1・3：了解でーす。

夢子：これも、忙しくなる時間の前に、雑用っぽい業務はすませておこうって合図のために必要な会話。それを、私は発展性がないつまらない会話だって傲慢に見下してた。それって、きっとまともな人付き合いが出来ない自分が恥ずかしかったからだと思う。

葛ちゃん：そんなことないって。

夢子：そんなことあるよ。私、自分は特別だって思いながら、自分からは何にもしてこなかった。本当は全然特別じゃないかもしれないから、可能性を消したくなかった。私は高慢ちきな雌ブタだった。

葛ちゃん：虎だけだね。

夢子：虎になって、やっとそれに気が付けた。でも、もう遅い。私はもう人間じゃない。じゃあ、30歳まで浪費されてしまった私の過去はどうなるの？

ナレ：夢子は、それを考えると、いてもたってもいられなくなって、山の頂上の岩に駆け上がって、たった一人、何も無い谷に向かって吠えた。私の悲しみをだれかに知って欲しくて、月に向かって吠えた。

夢子、バルコニーに駆け上がって、身をせり出して吠える。

夢子：ガオ————。

やまびこ：ガオ————、ガオ————、ガオ————。

夢子：でも、誰にも聞こえない。誰も、私の傷つきやすい心をわかってくれない。

莓ちゃん：だから、いくらだってウチが話きくって言ってんじゃん。なんでそうやって一人で考えて、勝手に自爆すんの。夢子いつだってそうじゃん！

夢子：色々聞いてくれてありがとう、そろそろお別れの時がきたみたい。

莓ちゃん：やだ…………そんなの絶対やだからね…………！

夢子：莓ちゃん、今まで、ありがとうね。

莓ちゃん：夢子、ちょっとヤダ、本当にマジいい加減にしなよ、早く降りてきなって！

夢子：それは出来ない。

莓ちゃん：なんで！

夢子：私はもうダークサイドに堕ちてしまったから。

莓ちゃん：はあ？ 私だって週6でシフト入るのクソだるいし、むげん堂で働いてるとさ、夜、寝ようとしても、インドのヒーリングミュージックみたいなBGMがずっと耳に残って辛いけどさ、死のうとは思わないよ。

夢子：莓ちゃんはさ、生活がドラマチックじゃん。彼氏が出来るたびに、フェイスブックにキスしてる写真いっぱい載せてさ、腕に彼の名前のタトゥー彫ってさ。で、すぐ別れてフェイスブックに重たいポエム書いてさ。またすぐ彼氏出来てさ。

莓ちゃん：うちだって、いい加減落ち着きたいと思ってるよ。もう見えないところにタトゥー彫るスペースないし。

夢子：それに、莓ちゃんは、私と違って、職場以外の色んなコミュニティに参加してるし。

莓ちゃん：はあ？ コミュニティ？

夢子：男女のグループでわざわざ車で心霊スポットに行っではしゃいだり、コンビニの前に無意味に何十人もで集まったり、ハロウィンにエロいコスプレしてクラブで性が乱れたイベントに参加したりさあ。

莓ちゃん：そんだけうちのことデイスれりゃ大丈夫だって。

夢子：褒めてんの。私は莓ちゃんみたいに、積極的に人と触れ合っただけを楽しめる人間性を持ち合わせていないー

莓ちゃん：別に夢子は夢子のままでよくない？ ちょっと面倒くさいけど。

夢子：よくない。私みたいなブスには存在意義がない。

莓ちゃん：あーもう。あのさ、そんな難しいこと考えないで、グレープフルーツ味のお酒飲んで、イケメンとパコったら、気分ぶちアガるって。とりあえず、ドンキ行こうよ。氷結ストロングと裂けるチーズおごったげる。

夢子：莓ちゃん、今までありがとう。

明かりが消える。暗闇に莓ちゃんの絶叫が響き渡る。

莓ちゃん：夢子ー！！！！

ドンキホーテのテーマ曲が流れ、ほどなく明かりがつく。

夢子と莓ちゃん、しゃがみこんで氷結ストロングを飲み、盛り上がっている。

その様子を、シンデレラ・ラプンツェル・赤ずきんが少し離れた場所から眺めている。

夢子：氷結ストロング最高ー！

莓ちゃん：楽しいでしょ、人生って。

夢子：そうだね、(ドンキのビニール袋を掲げて) さっき、すごいいいの買えたし！ これさあ(袋から中身を取り出そうとする)

莓ちゃん：後にしよっか。そろそろ家帰ろ、ね。

夢子：やだ。

莓ちゃん：明日も会社でしょ。帰ってシャワーサツと浴びて、寝な。

夢子：じゃあ、ここでシャワー浴びるわ。

夢子、服を脱ごうとして莓ちゃんに制止される。

莓ちゃん：やめなって。アンタ、本当は可愛いんだからさ。ドンキの前なんかで脱いだら、リアルに襲われるよ。

夢子：はあ、私みたいなドブスの裸なんかみんな興味ないから。

莓ちゃん：ドンキの客の民度の低さナメんな！

夢子：（首元のスカーフを外して）はい、一枚目〜。

10 場 夢子の死の真実

シンデレラ：ちょっとちょっと、

夢子：はい？

シンデレラ：結局死んでないじゃん。

ラプンツェル：（夢子の首に浮き出ている、縄のしめ痕に気づき）ねえねえ！

赤ずきん：後にしよう。

莓ちゃん、ラプンツェルに縄のしめ痕を見られたことに気づき、慌てて夢子の首にスカーフを巻き直す。

夢子：あれ？ 何で？ 私、確かに、莓ちゃんに今までありがとうって言って、え〜？

莓ちゃん：ごちゃごちゃ言ってたけど、結局一緒にドンキ行ったじゃん。お姉さん達は死んでるけどアンタは泥酔してるだけ。ほら、行こう。じゃあ、お騒がせしました〜

莓ちゃん、夢子を急かして立ち去ろうとするが、夢子が足を止める。

夢子：待って。

莓ちゃん：何？

夢子：変だよ。私、泥酔してたらこんなにちゃんと話せたくない？

莓ちゃん：だからさ、(腕で大きく円を描き、ジェスチャーでベン図を表わしながら)こっちが泥酔してる夢子の夢、こっちがバイト先の休憩時間に寝てるウチの夢、このダブってる面積の部分がここ。まあ、数学的な説明でいうと、そんな感じ。

夢子：なんか、ウチの理系オタの兄みみたいな言い方、どうしたの？

赤ずきん：あのアマチュア無線部の！

夢子：そうそう、あの人未だにやばくてすごいオタクだし、最近DJなんか始めちゃって、

莓ちゃん：最近のギャルは数学ブームきてるから。ほら、早く戻ろう。

夢子：待って、莓ちゃんはなんで死んでる人達と話せるの？

莓ちゃん：ああ、ユークャンで、死んでる人と夢の中で話せる資格を取得したんだよね。

シンデレラ：見かけよりしっかりしてんのね。

莓ちゃん：今ってマジ不況だし、やっぱギャルも資格取らなきゃなんで。ユークャンって、「ユッキーナが資格に挑戦！」みたいなCMやってるじゃないですか。やっぱユッキーナの頑張りってギャルの誇りなんで。ユッキーナとフジモンのカップルって、

ラプンツェルがこっそり夢子に近づき、首のスカーフを外す。

ラプンツェル：(しめ痕を指して)ほらーほらーほらー

シンデレラ：首に紐で絞められた痕がある。

赤ずきん：なんですかこれ？

莓ちゃん：なんでもないっす。

夢子：やっぱり私、死んでるんじゃない！

莓ちゃん：生きてるんだって。それに、思い出さない方がいいことだってある。ほら、

夢子：やだ。私、ここにいる。こんな気持ちのまま生き返れない。

莓ちゃん：だから、一度も死んでねえから。もう、変なところ頑固なんだから……よし、どうせいつまでもウジウジ現実から逃げてらんないし、こうなったら気合入れてビシッと思い出しな！

夢子：わかった。

莓ちゃん：昨日の夜、ウチは泥酔した夢子を家まで送っていった。

夢子：（思い出しながら）それで、部屋に帰ってお布団にもぐって、そしたら、王子様がやってきた。

ラプンツエル：お部屋に王子様がきたの？

1場の理想の王子登場。夢子と王子様、人目もはばからずイチャイチャしだす。

夢子：私は、現実の世界で生活してる時は心が完全に死んでいて、妄想の中でだけちゃんと生きられるの。だから、昨日の夜も、理想の王子様を思い浮かべて、彼といちゃいちゃして幸せな時間を過ごしたの。

王子様：耳、無いほうが可愛いよ。

夢子：はい、耳なんかありません。

王子様、夢子の虎の耳をとる。

ラプンツエル：とれるんだー

夢子と王子様、激しくキス。王子様が夢子を押し倒す。

シンデレラ：（大きく手を叩いて）ちょっと、こっちに集中してもらっていいかな？ 王子様はモデルがいるの？

夢子：現実世界では、毎日、通りがかりに、その人がタバコを吸っているのをチ口っと思っただけ。いつもほんの一瞬目が合ってる気がするけど絶対気のせい。

莓ちゃん：それって……

夢子：え？

莓ちゃん：なんでもない、続けて……

ラプンツエル：実際に話してみたいって思わないの？

夢子：絶対いや。話したら、きっと私みたいなコミュ障のブスは嫌われる。話さなければ、好かれることもないけど、嫌われることは絶対ないでしょ。彼、すごく真面目で賢い人だと思うし。

ラプンツエル：ラブだったら絶対両想いになりたいけどな。

夢子：私は、夢は夢のまま、幸せのピークで死にたかった。それで、王子様に首を絞めてくれるようお願いした。王子様が私の首を、ゆっくり、ゆっくり、

シンデレラ：待って、でも、この人って夢川ちゃんの妄想の中の人なんでしょ？

夢子：でも、確かに私は王子様に首を絞められた。

赤ずきん：これは何かのメタファーじゃないでしょうか？

シンデレラ・ラプンツェル・赤ずきん、メタファーを連呼しながら王子様を指差す。王子様、混乱して頭を抱えながら、走り去る。
どこからか、振動音がかすかに聞こえてくる。

シンデレラ：まって、静かに、なんか聴こえる。

ラブ：ベッドの下からだ……なんだろう？えいっ！（ベッドの下からバイブを取り出す）え、あ、ラブ、なんだかわからな〜い。あ、回ったあ！

シンデレラ：絶対知ってる。

赤ずきん：カマトトぶってるんではよ。

莓ちゃん：メンヘラってハードなセックス大好きですよ。

ラブ：なんたる、キラキラしてて魔法のステッキみた〜い。「月に変わってお仕置きよ！」

シンデレラ、足早にラプンツェルに近づき、バイブのスイッチを切る。

夢子：えーやだやだやだ、うっすら記憶戻って来た。無理、絶対受け止めきれないやつだこれ。

赤ずきん、王子様が置いていったマントの下から、片方を輪っか状に結んだ紐を見つける。

赤ずきん：あの、それ（バイブ）を使いながら、この紐で首を絞めていて、うっかり強く絞めすぎたんじゃないですか……ちなみに、一説によるとXのhideやキル・ビルのビル役の俳優が命を落とした原因がこれだそうです。

ラプンツェル：やっぱり、同人誌描いてる人ってそういうの詳しいんだ〜

赤ずきん：でも、女性のこういうのはちょっと……

シンデレラ：でも女性だって性欲はあるし、オナニーすることを恥ずかしがる必要ないと思う。

莓ちゃん：お姉さん、江角マキコっぽいっすね。

ラプンツェル・シンデレラ：(パイプの形状を見て含み笑い) あー。

莓ちゃん：なに、その目。自分で買うって言い出したんだからね。

夢子：うそ、絶対ありえない。

莓ちゃん：なんか、コイツ、レジ並びながら「今日からこれが私の彼氏でーす」って、すげえデカイ声で言ってきて、

夢子：嘘！ って言いたいけど、記憶がかなり鮮明に蘇りつつある。

莓ちゃん：で、まあ、とにかくクソ酔っぱらってたから、家連れて帰ったんすね。で、一時間後くらいに、おばちゃんがお風呂入るか聞きにこの子の部屋入ったら、まあほらエライことになってて、(夢子ママの口調で)「きゃーどうしよう！ お兄ちゃん、ちょっときてー！ 」

夢太郎：どうした！？ ゆめ…………こ…………

夢太郎、妹のあられもない姿にドン引きし、目をそらしたまま脈を調べる。

夢太郎：大丈夫、一瞬失神しただけで脈はある。

莓ちゃん：(夢子ママの口調で) お兄ちゃん、救急車呼んだ方がいいかしら？

夢太郎：いや、寝かせておこう。でも、このままじゃまずいな。莓ちゃーん！

莓ちゃん：で、ウチが呼ばれて、パンツはかせたりとかいろいろして、で、

夢太郎：よし、みんな一生絶対忘れられない光景だと思うけど、せめて本人の前では全力で忘れたふりしよう。

夢太郎・莓ちゃん：オー！

夢太郎と莓ちゃん、漫才が終わった時のようなお辞儀をする。

赤ずきん：これが男性だったら、すごく美味しいシチュエーションなんですけどねえ。

夢子：あのさ、なんで莓ちゃんは、わたしんちにずっといたの？

莓ちゃん：ああ、あの、実は……ウチ、一週間前から、あんたのお兄ちゃんと付き合ってるんだ。

莓ちゃん、夢太郎の腕にピヨンと飛びつく。

夢子：嘘でしょ？ 理系の男性なんか興味なかったじゃん。

莓ちゃん：や、なんかギャルって強いじゃん。で、夢タロスは強え言葉いっぱい知ってっし、そこで意気投合したっつか。ソ？ ソフィ？

夢太郎：ソフィスケイト。

莓ちゃん：コン。(手でキツネをつくって)コンコン。

夢太郎：(互いの手でつくったキツネ同士をキスさせながら)コンバージョン。

莓ちゃん：ね、超便利っしょ。見て。

莓ちゃん、おもむろに袖をまくりあげタトゥーを見せる。

ラプンツェル：(タトゥーの文字を読んで)夢太郎アンド莓。

シンデレラ：エターナル、ストロベリー、ドリーム。

莓ちゃん：ウチは死ぬまでずっと夢タロスと甘い夢を見ながら、しっかり家計をやりくりして、子供は二人、大学へ行かせるなら国立、子供が手を離れたらイオンモールでネイルサロンを経営する、っていう方針で生きていく。

シンデレラ：ギャルって背伸びをしない人生設計得意よね。

夢子：じゃあ、現実世界でお兄ちゃんとお幸せに。私は無理。もう生き返りたくない。

莓ちゃん：だから、一回も死んでねえから！

夢子：じゃあ今から死ぬ。みっともないブスとして生き続けることなんの意味があるの？

色男：莓ちゃーん、おーい、レジ変わってー。

莓ちゃん：お前空気読めよ。ここ、レジがある世界観かよ。

色男：莓ちゃーん？ ブスー？

夢太郎：おい、莓ちゃんは女性という社会動物の中で一番ソフィスティケートされた存在だからな！

莓ちゃん：ありがとう夢タロス！

色男：おーい、白眼むいて寝てるブスー、起きろー。

夢太郎：おい、莓ちゃんは、俺というスーパーコンピューターが統計的に一番可愛いと判断した女性だぞ！

莓ちゃん：夢タロス、うちらマジ恋だね！

現実世界の莓ちゃんの意識が覚醒するにつれ、夢の世界が徐々に暗くなっていく。

莓ちゃん：あー、ウチ、マジもう行かなきゃ。あのさ、現実の世界では、もう次の日の夕方だからね。いい加減に起きな！

夢子：嫌だ！私はもう終わらせたいの。

莓ちゃん：とにかく、あとで現実の世界で話そう。バイト終わったら家寄るね！ 夢タロスに寄生獣の続きかりなきゃだしー！

莓ちゃん、何かに吸い込まれるようにして去る。明かりが消える。

夢太郎：あれ？ 莓ちゃーん！

11 場 莓ちゃんと色男 その4

莓ちゃん、バルコニーで起き上がる。

色男：お、起きた。早くレジ変わって。

莓ちゃん：今日はお前が惚れてる女は下通らないよ。二日酔いで家で死んだように寝てるから。しかも、会社への欠勤の連絡をお母さんにしてもらってという社会人としてマジクソなことしてるから。

色男：なんで知ってるの？

莓ちゃん：それは……あーどうしよっかな。

色男：あ、可愛い。莓ちゃん可愛い。

莓ちゃん：よし、まずは適正な距離まで離れて。うちには大切な彼ぴっぴがいるんだから。

色男：それは、人？

莓ちゃん：決まってるだろ。理系で靴の先がシュッと尖ったいい男だよ。そんなことより、念のため確認だけど、お前が好きなブスって、全体的な仕上がりは地味なブスなんだけど、よく見たらスゲー綺麗な顔してて、逆にお前の自意識インフレ起こしてるだろ、みたいなブス？

色男：そう！ 地味なブスだけど実は美人っていう少女漫画のヒロインにありがちな感じではあるんだけど、でも、ヒロインになるには卑屈さがちょっとヤバいレベルのブス。なんで？ 知り合い？

莓ちゃん：まあ。心友。

色男：え！ ちょっと！

莓ちゃん：そこ座れ。

色男：レジが無人になって、お香万引きされちゃうよ。

莓ちゃん：あんなくっせえお香どうでもいんだよ。今からウチがお前のことを面接する。

色男：え、俺正社員になる気ないっす。

莓ちゃん：ウチもバイトだろ。お前が、大事な心友をちゃんと大切に出来る男かどうか、ウチが改めて面接する。

12 場 悲劇のヒロイン達〜本当の物語編〜

シンデレラ：押し付けるわけじゃないけど、私は、ブスでもなんでも、生きられるチャンスがあるなら戻った方がいいと思う。私自身、死ぬって経験をしてみて、

夢子：あ〜もう、めちゃくちゃグイグイ押し付けてるじゃないですか。

赤ずきん：でも、私もすごいブスな死に方した死者として、シンデレラさんと同意見です。

ラプンツェル：ラブも。それに、夢子ちゃん本当は美人だし。

夢子：もう、なんなのさつきからブスとか美人とか。死んじゃったらさ、みんな同じ、た

だの土じゃん。

赤ずきん：でも、本当に後悔するから。あなたのために言ってるの。それに、世の中には生きたくても生きられない人だっていっぱいいるんだし。

シンデレラ：赤ずきんさんの言う通り。

夢子：偽善かよ。そもそも、あなた達、新田玲奈さんと鈴木亜希子さんと津枝アユちゃんでしょ。さっきからお互いにシンデレラ、赤ずきん、ラプンツェルってウケるんですけど。人には偉そうに色々言ってくるけどさ、実際、三人とも、自分自身も死に方も、全然ブスだなんて思っていないですよ。すごいキレイキレイな感じにしちゃってるじゃん。

赤ずきん：もう埒あかないから、実際見てもらいましょうよ。

シンデレラ：そうね、それであなた自身で決めてよ。

夢子：見るって？

ラプンツェル：三人の本当の物語。

夢子：そうやってまた私私私、私の話。興味ないって言ってるじゃん。ほら、そうやって勝手にはじめないでってば！

夢子の周りにいつのまにか裕二（王子様）と後輩が寝っころがり、スマホでゲームに興じている。玲奈（シンデレラ）がドアを開けて入ってくる。

夢子、突然始まった物語にどうしていいかわからず、その場に固まっている。

玲奈：ただいま。

裕二：おかえり。

後輩：おかえりなさい。

裕二：（後輩のこと）前、ライブで会ったの覚えてるっしょ？

玲奈：大学のサークルの後輩の方。

後輩：ねえさん、おひさしぶりで〜す。

玲奈：ねえさん……ねえ、今日、夜番じゃなかったっけ？

裕二：休んだ。

玲奈：なんで。

裕二：プロデューサーがさ、自主レーベル立ち上げるから相談に乗ってくんないかって。俺らのバンドをメインでプッシュしてくれるって。

玲奈：二人で遊ぶためにバイト休んだんだ。

裕二：もうほぼほぼスポンサーもつきそうだし、こいつの同級生が電通にいてさ、そいつも巻き込もうってことになって。

後輩：結構デカイ話になりそうなんすよ。

裕二：メジャーの奴らとも互角に戦える、

玲奈：ツムツムやめろ〜〜！

後輩：テトリスですけどね。

玲奈：（後輩に）あー、ごめんなさい。今日はもう帰ってもらっていいですか。

裕二：三人で飯行こうって、こいつ、腹減ってるのにずっと待っててくれたんだよ。

後輩：まあまあまあ。じゃあ、僕、今日はこれで失礼します。また、連絡します。

裕二：ありがとう、お疲れ。

裕二、後輩を見送ってドアを閉める。

裕二：何？今の態度。そっちが怒ってるのはわかるよ。でも、俺の後輩に当たるのは、違くない？

玲奈：もう、うんざりなの。いい加減にしてよ。そうやって、見えない巨大な敵と戦う時ばかり威勢よくってさ。現実ともちゃんと戦ってよ。そういうの全部私じゃん。家賃も車だってさ、結局、やれスタジオで練習だ、やれライブの搬入だって、

裕二：わかった、もう俺出てくわ。行くところ決まったら荷物まとめるから。

玲奈：は？今すぐ出てってよ。貸してるお金もいますぐ返して。

裕二：少しずつになるけどちゃんと払うから。

玲奈：なんで、そんな一切守る気ない約束するの？

裕二：守るって。

玲奈：守れるわけない！ あのさ、アンタのママが可愛いボクちゃん宛にいろいろ宅急便で送ってきた時の伝票、取っというてあるから。責任能力ないんだから、親御さんにご相談するしかないよね。

裕二：親関係ないでしょ。

玲奈：ある！ 本当のこと知ったらびっくりするだろうね。東京ですごくバンド活動が順調で、有名人とたくさん知り合いだっけ言いまくってるんでしょ。バイトもろくにっつまらないただのヒモのくせに。

裕二：だから、絶対自分で払うって。

玲奈：絶対払えない。

裕二：じゃあ、どうすればいいの？

玲奈：死んで。

裕二：え？

玲奈：いつも言ってるじゃん。俺、別にいつでも死ねるしって。

裕二：言ってるけど。

玲奈：あれ嘘なの？

裕二：嘘じゃない。

玲奈：じゃあ死んで。私があなたの為に使った時間もお金も全部いま死んだの。全部なかったことになったの。だから、あなたも死んで。

裕二：無理に決まってるじゃん。

玲奈：じゃあ今、ご実家に電話するね。

裕二：あのさ、

玲奈：じゃあ死んで！

裕二：や、だってそれはさあ、カート・コバーンが27歳で死んだからで、俺もう28歳になっちゃったし。

裕二、いらだって頭を掻きむしる。

玲奈：私、ダンボールの中に入れてたお手紙、私読んじやっただけどさ、「私たちに夢をみさせてくれてありがとう」って書いてあったね。

玲奈がスマホで実家へ電話をかけようとするのを、裕二がとめる。

裕二：俺もたいがいだけどさ、人の親にそういうことするのって、人間として最低だと思うよ。

玲奈：帰ってくるまでに死んでてね。

玲奈、ドアを叩きつけて外に飛び出す。

裕二、スマホで電話をかける。

裕二：あ、敦子？　なんか別れる感じになったからさ、今から家行っていい？

玲奈、ドアを開ける。

玲奈：あと、あんたとのセックスで一回もイッたことないから。

玲奈、再びドアを閉め、走って車に乗る。急いでエンジンをかけて発車させる。

ナレ：新田玲奈は、車に飛び乗りました。

玲奈：もう、実家に帰りたい。

ナレ：ところが、新田玲奈はあまり運転には適さない心境でした。

急ブレーキとクラクションの音が響き渡り、対向車のライトに玲奈が大きく照らし出される。

玲奈、上半身がガクンと前に倒れる。

夢子、なすすべもなく、その光景を眺めている。

明かりが変わり、玲奈が去る。

代わってアユ(ラプンツエル)が入ってきて、ソファに腰掛ける。ほどなく玄関のベルが鳴り、アユが楽しそうに玄関へ向かう。間男を引き入れて戻って来る。

夢子、逃げそびれて、ソファの傍に突っ立っている。

間男：おじゃましまへす。TVデケエ。旦那さんすごい稼いでるね。

アユ：でもほっとかれて、すごいさみしい。

間男：だから、俺がいるんじゃない。

アユ：だよな。

間男：今日旦那さんは？

アユ：明日まで京都に出張。

間男：悪い女だなあ。

アユ：えー。

夫、音もなく帰ってきて、間男のシャツのボタンをアユが外すのをじっと見ている。夢子、二人より先に夫に気づくも、アワアワするだけでどうすることもできない。

夫：ただいま。

アユ：おかえり。あの、違うの。ねえ（助けを求めるように間男を見るが無視される）

夫：何が違う？

アユ：だって、

夫：うちのとTSUTAYAで一緒に働いてる人？

間男：はい。

夫：学生さんかな？

間男：はい。

夫：帰っていいよ。

間男、大急ぎで走り去る。

アユ：あの、だって、全然最近 12 時前に帰ってきてくれないし、LINEも既読ついてるのにお返事くれないし、今日だって夜ずっと一人だと、アユすごい色々考えちゃって辛い、知ってるでしょ。

夫：だったらお義母さんところに泊まればいいじゃん。

アユ：だって、あなたがいつもママとはもっと距離置いた方がいいって言ってるから。

夫：急にパートしたいって言い出したから、嫌な予感したんだよ。や、ちょっと今回はさすがにキツイわ。

アユ：だって、さみしかったから。なんか、気持ち悪い。さっき熱計った時36度8分もあって。

夫：もうしないってあれだけさ、

アユ：だって、あなたが、

夫：しないって約束したじゃん。

夫、顔を伏せ、肩を震わせて泣きだす。

アユ：ごめんね。

アユ、夫を抱きしめるが、すぐ突き放される。

夫：触らないで！

夫、フラストレーションをぶつけるように、壁に手を叩きつける。夢子はその傍にちょうど立っていて、壁ドンになる。

アユ：どこ行くの？

夫：わっかんない。とりあえず、落ち着いたたらまた連絡する。

アユ：あの、もしお腹空いてたら、ママが伊勢丹のお惣菜持ってきてくれたの。冷蔵庫の中に入れてくれたって。

夫：はあ？

夫、出て行こうとするも、アユが腕を掴んですがる。

アユ：ねえ、お願い、嫌いにならないで。ね、お願い。

アユ、夫のベルトを外しチャックに手をかけるが、夫に拒絶される。

夫：ホント無理だから。

アユ：どうして？ あなたのこと大好きなの。

夫：だったらなんで。もう、キリがないから終わりにしよう、終わりにさせて。

アユ、態度を豹変させ、夫をバンバン叩きながら責めたてる。

アユ：アユ、普通の人より生まれつき心も体もすっごく弱い。知ってて結婚したんじゃないの？

夫：弱さって、最強の武器だな。

アユ、立ち上がり、夫の顔を手で包み込む。

アユ：ねえ、眠るまで一緒にここにいて。お願い。ねえ、アユがどっかにいなくなってもいいの？

夫：アユは、どこへも行けないよ。

王子様、振り向きもせずドアから出て行く。

アユ：お酒……お酒飲まなきゃ……お薬も、もっと飲まなきゃ。

アユ、錠剤を口に放り込み、お酒で流し込む。

夢子、プウちゃんを持って近づくが、声をかけることができない。

夢子がためらっている間に、アユは母親に救いを求めて、スマホから電話をかける。

アユ：ママ？ え……彼から？ はあ?! なんてママまでそんなこと言うの？ こうなったのはママのせいでしょ。ママは毒母だよ。ママがアユを束縛したせいだよ。それに、パパがいたらこんなじゃなかったよ、きっと。

アユ、電話を切った勢いそのまま、大量に錠剤を飲み下す。

夢子：……あ……

アユ、錠剤やお酒と自撮りをしてツイートする。

夢子、プウちゃんをアユの傍にそっと置く。

アユ：睡眠薬とお酒、なう。死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい。

椅子に突っ伏すアユにスポットライトが当たっている。アユ、つぶやきながら、徐々に意識を手放す。

ナレ：津枝アユは、SNSを更新しながら、やがて眠りに落ちました。そして、二度と目覚

めることはありませんでした。

明かりが代わってアユが去る。代わって亜希子(赤ずきん)が入ってきて、薄ら笑いを浮かべながら叫ぶ。

亜希子：出来た！ 今度こそ完璧！ コミケでバンバン売るよー！

ナレ：残念ながら、鈴木亜希子さんのBLはあまり話題にはならず、やがて、同人誌の印刷代で多額の借金を背負うようになりました。

亜希子：ごめんね、おばあちゃん。

ナレ：いつしか、亜希子さんは、おばあさんの年金をあてにするようになりました。

おばあちゃん登場。亜希子に話しかけるが、亜希子は見向きもしない。

おばあちゃん：いいのいいの、可愛いあきちゃんの為だから。おばあちゃん、あきちゃんのためになにか出来るのすごく嬉しいんだから。

おばあちゃんがよろけて転びそうになり、夢子が助ける。

夢子：大丈夫ですか。

亜希子：会ってないの。

夢子：え？

亜希子：だから、子供の時、変態に襲われかけた日から一度も会ってないの。電話もしてない。

夢子：じゃあ。

亜希子：母と祖母は元々上手くいってなかったから、完全に絶縁状態になっちゃって。でも、借金の取り立てがきつくて、どうしてもすぐお金欲しくて、それで、老人ホームのおばあちゃんに手紙かいたの。

おばあちゃん：お手紙ありがとうね。

亜希子：あの日の出来事のせいで、男の人が怖くてまともな仕事につけないって。だからお金が必要だって書いた。そしたら、年金の支給日の翌日にお金が届くようになった。お金が届いた日、ちょっと贅沢しようと思って、フレンチのお店にいったの。おばあちゃんの年金で高い生牡蠣食べたの。それで、あたって死んだ。

玲奈、アユも登場し、夢子を囲む。

玲奈：わかったでしょ？

夢子：は？勝手にしゃべって、気持ち良くなんでもらえます？！！自己満足のために、他人のこと消費すんな！！

玲奈：何その言い方。

夢子：今のだって、結局、自分が悲劇のヒロインの物語じゃん。あんた達みたいな自己顕示欲の強いブスはさ、私はこんなに辛い、私はこんなに頑張ってるってネットで全世界に向けてアピールしてさ、構ってほしくて自撮りアップしてさ、何様だ！私もドブスだけどあんた達もドブスだ。しかも人に迷惑かけるタイプのブスだ！

「ベートーヴェン ピアノソナタ 第14番 月光 八短調」が流れてくる。明かりが紫や赤みを帯びて、徐々に色濃くなっていく。

アユ：あのね、自撮りって自分のこと可愛いって思ってるから撮るんじゃないの。

夢子：そうですか。私、全く自撮りしないので。

アユ：逆なの。何枚も自撮りして、加工して、一番いいのをSNSにアップして、可愛いって褒めてもらって。それで、やっと自信をかき集めてるの。

玲奈：死んだ人の思い出話ってだんだん、生きてる側がそう思いたい物語にすり替わっていくじゃない。死んでる側からもそうなんだよね。

赤ずきん：何度も何度も、自分のブスな死に様を思い出して。心が耐えられないから、少しずつ少しずつ、入れ替えていくんです、私がヒロインでいられる物語に。

夢子：そんなの、そんなの。

玲奈・アユ・亜希子がじわじわと夢子に近づく。夢子は追い詰められ、玲奈の膝枕でアユと亜希子に太ももや二の腕を撫でられながら、語りかけられる。

アユ：(リストカットの痕を見せながら)見て、また切っちゃった。可愛い？

シンデレラ：私が頑張らないと、みんななんにも出来ないんだから。

亜希子：(高笑い)

夢子：なんで、なんで私に言うの？

玲奈：言ってるのは本当に私達？

アユ：夢子ちゃんでしょ。

夢子：はあ？ 私は別に他人にも自分にも興味ないし。

亜希子：会社で仕事してる時も電車に乗ってる時も、心の中でずっと喋り続けてるじゃない。

玲奈：熱くなって頑張ってる人のことを心の中でバカにして、誰よりも賢いと思ってるんでしょう？

アユ：辛いてさみしいって口に出す人より、自分の方がずっと辛くてさみしいって思ってるんでしょう。

亜希子：妄想の世界に引きこもって、安全な場所からみんなを見下してるんでしょう？

夢子：は？ 何言ってるの？

玲奈：よく考えて。

アユ：よく考えて。

亜希子：よく考えて。

玲奈・アユ・亜希子、夢子にささやいて去る。

夢子、理想の王子様が置いていってからずっとその場にあったマントをかぶって、まるくなる。徐々に明かりが消え、暗闇の中に夢子の叫び声だけが聞こえる。

夢子：考えて？ もうずっとずっとずっとずっと考えてるんですけど。毎日頭の中で同じことをぐるぐるぐるぐるさあ、あ—————なんで？ なんで私ばかりこんな目に遭わなきゃいけないの？ あ—————。考えてるよ。考えすぎてこうなったんだよ。あ—————。私だって、私だって、本当はわかってんだよ。

13 場 旅立ちの時

鳥のさえずりが聞こえてきて、明かりがつく。

玲奈・アユ・亜希子、全身真っ白な服で、頭には白いベール、手にはブーケを持っている。

玲奈：ほら、いい加減起きなよ。こっちの世界でも寝坊するの？

アユ：（自撮りをしながら）白って膨張色だし、すごいデブで恥ずかしい。

亜希子：まあ、白装束は、旅立ちのお約束なので。

夢子：どこか行くの？

亜希子：汽車が来るから。

夢子：え？ いつ？

玲奈：私たちが先へ進む気になったから、きっとすぐに来る。

夢子：なに、超適當。

アユ：切符は持ってるよ。

夢子：へえ、そんなもんなんだ。え？ちょっと待って、さっきのうわあああってやつ、全部ば——って吐き出してスッキリ～みたいなこと？

玲奈：ざっくり言えばね。

アユ：女の子だから。

夢子：何それ、私のことサンドバッグみたいにしといて。

玲奈：でも、夢川ちゃんもそれぐらいのこと、私達にしたと思うけど。

夢子：それはまあ。

亜希子：というわけで、私達、今から旅立ちの挨拶をします。あ、夢川さんはそっちで。

玲奈・アユ・亜希子、壇上にあがる。夢子、その前で見守る。

玲奈：本当のお葬式の時はず、挨拶って、喪主が言うじゃない。でも、ちゃんと自分の言葉で言いたいなあと思って。

亜希子：なので、生きてる人はそっちで聞いといて下さい。

玲奈：では、一言ご挨拶申し上げます。私達の死はあまりに突然でした。今でもまだ、信じられない気持ちです。

アユ：でも、やっと、骨も内臓も全部なくなったんだなあって実感出来たら、身体がとっ

ても軽くなって、空も飛べそうです。生きていた時体が重くて窮屈だったのは、それこそが生きている証だったんだなあって気がつきました。

亜希子：そして、私達は死んだからといって、天使のような性格には変わっておりません。生前よくして下さいだった皆様、どうか健康に気をつけて、元気にお過ごしください。生前よくして下さいなかった方、それなりにお過ごし下さい。

玲奈：ではまたお目にかかれます日まで暫しのお別れです。

三人：ありがとうございました。

アユ：はい、じゃあお願いしま～す。

夢子：は？私？

亜希子：友人代表の弔辞です。

玲奈：正直、生きてた時は友達ってほどじゃなかったけど、本音ぶっちゃけあったしねえ。

夢子：そんな急に言われても。

玲奈：早く、汽車もう来ちゃうから。

亜希子にうながされ、夢子がおずおずと壇上にあがる。

夢子：えっと……私は、皆さんのお葬式に行きました。別に親しくなかったのに、わんわん泣きました。正直、お葬式の雰囲気にもまれたっていうのも大きいと思います。あと、同じ毎日が永遠に続くんじゃないって、今日も生き延びたんだ、今年も生き延びたんだ、って思って生きていかなきゃいけないって、自覚したからだと思います。生きてる側の都合で嫌な思いさせてごめんなさい。でも、生きてく為に必要な事なので、勘弁してください。いつ、自分にその時がくるかわからないけど、それまで、ブスはブスなりに、少しでもマシなブスであるためにあがこうと思います。あ、結局私、自分のことばかりだ！

玲奈・亜希子・アユ：知ってるー

夢子：あと、あの、私、小三の時、おじいちゃんが死んだんですね。お葬式の時に、反抗期で家族と全く口をきかなかったお兄ちゃんがお母さんの手を握ってあげてるの見て、なんか、お葬式って悲しいだけじゃないなって思って。

玲奈：私も、子供の時、大人がお葬式でバタバタしてる間、従兄弟達と大広間でトランプ大会してて「お葬式って楽しいな」って思った記憶ある。

亜希子：同窓会じゃないけど、学生時代の友達とまた縁が繋がったりね。

アユ：生きてる側のイベントでもあるんだね。

玲奈：なんか、今、いい話っぽくまとまったね。

亜希子：うわーそういうの無理です私。

夢子：今のうちら、男子の漫画によくある、思いっきり殴り合って、そのあと河原に並んで寝そべって、「お前強いな」「お前こそ」みたいな空気、ちょっと醸し出しちゃってませんか？

皆、口々に気持ちわるーいなどと騒ぎ、盛り上がる。

玲奈：よし、もうこれ以上キモいことになる前に行こう！

アユ：なんか、聴こえてきた。

汽笛が鳴る。

亜希子：汽笛じゃない？

夢子：では、皆さんの新たな旅立ちを心より応援しています。またいつか。

先ほどより少し大きく汽笛が鳴る。

玲奈：夢川ちゃんも戻るんだね。

夢子 まあ。

アユ：じゃあ、現実世界という名の地獄で、地を這いつくばって頑張っただね。

夢子：言い方。

亜希子：(ブーケを見て)忘れてた！ いきますよ！

夢子 ちょっと！

玲奈・アユ・亜希子、絶対とって！など、スポ根な感じでブーケを次々と夢子へ投げる。

大きな汽笛が鳴り響き、強い光と共にメーテルが現れる。

メーテル：皆さん、お待たせしました。

玲奈・アユ・亜希子、口々にじゃあね、など別れの言葉を口にしながら、光の中へ消えて

いく。

メーテル：では、出発いたします！

大きな汽笛が鳴り響き、光が消える。

夢子：瞼を閉じます。

明かりが消える。

14 場

ドンキホーテのテーマがかかり、寝ぼけて口ずさみながら夢子が起きる。そこは、服や飲みかけのペットボトルが散乱している、夢子の汚い部屋。夢子、虎の顔が大きくプリントされたダサいスウェットを着ている。ベッドの上に、鳩サブレの缶が入ったドンキのビニール袋を見つける。

夢子：（ドンキの袋を剥ぎ取って）うわ～、早くも死にたくなってきた……鳩サブレ？

鳩サブレの缶を開けると、パイプと紐が丁寧にしまわれている。

夢子：実家のこういうところ嫌い！

夢子ママとノンさんの声が部屋の外から聞こえてくる。

夢子ママ：夢子～、もう夜よ。いい加減起きなさい。

ノンさん：ワンワンワン。

夢子ママ：ね～、ノンちゃんも言ってやって。「お姉ちゃん、アタチ、夕方のお散歩終わったわよ」そうよね～。

夢子：起きてるってば！

玄関のチャイムが鳴る。

夢子ママ：あら、むげん堂の帰りにわざわざ。どうぞ上がって。夢子～心配してお友達が来てくれたわよ～

夢子：どうせお兄ちゃんに会うついででしょ。うわ、思い出しちゃった、あの二人がいちゃついているとか最悪。このさい、一人暮らしするか。

ドアを開け、色男が入ってくるが夢子は気付かない。

色男：へー、一人暮らしするんだ。

夢子：え？うそ？なんで？

夢子、思わず色男を押し戻して、ドアを閉める。

夢子：あの、私、その、昨日の夜酔っ払って、だからシャンプーもしてなくて、その部屋もそんな綺麗じゃないっていうか、

色男：大丈夫、こっちも突然来ちゃったから。ごめんね。また来ます。

夢子、せっかく来てくれた色男を拒絶してしまった自分に腹をたて、ポケットに手をつこんで地団駄を踏む。

夢子：(ポケットから切符を見つける)ブラックホールの向こう側を知るには、見に行くしかない。

夢子、意を決して、ドアを開ける。

ノンさんに噛まれた色男が、ドアから飛び込んでくる。

色男：いたいたいたい！ ノンちゃん、かわいい！ すごくかわいいから！

夢子、ノンさんを抱いて、部屋の外へ出す。

夢子：おかあさーん。ノンさんがあ！

夢子がとっくにノンさんを引き離しているのに、色男はそれに気づかずずっと痛がりながらノンさんを褒めている。その様子に、夢子は思わず笑ってしまう。

色男：あ、笑った。笑うと可愛いね。

夢子：わあ……息をするように可愛いって言える男性……こわい。もっと、真面目な感じの人だと思ってた。あ、あの、私、すみません。こんな変な服で、これはたまたま、

色男、パーカーを脱ぐ。トラの顔がついたTシャツを着ている。

色男：おそろいだね。

夢子が距離感の近さに戸惑っているのを察知して、色男がちょっと離れようとする。夢子

が腕を掴んで引き止める。

色男：あのさ、絶対いつも、一瞬だけ目あってたよね。

夢子：いつもビルの二階でタバコ吸ってた。

色男：うん。はじめてちゃんと話せたね。俺、話すと結構印象違う？

夢子：ぜんっぜん違う。

色男：髪の毛食べてるよ。

夢子：笑うと髪の毛食べちゃう……

二人の唇が少しづつ近づいていく。

明かりが消える。

終わり。